

獣類の挙動

尾上梅幸*¹

〈出典：「女形の事」主婦之友社、昭和19年6月〉

次は獣の手についてお話しましょう。獣にもいろいろありますが、多く舞台へ出る役では狐、猫などが数えられます。

先ず狐、狸、猫のような獣の手は、両手を胸へやる時に、大抵乳のあたりへ持って行きます。其時指先だけを折曲げるのが定めになっています。例えば『義経千本桜』の『狐忠信』の如きもそれで舞台では人間の扮装をして出ますが、狐である心持を見せる時には、右に申した指先を曲げる仕料で獣心を現わします。しかし、これは始終曲げているのではなく、狐に大なる場合だけ指先を折るので、人間に戻れば折った指を伸して、人間と同様な動きに戻るとというのが、役の変化を見せる仕料になっています。例を挙げて言えば、前申した『忠信』のような役では、『四の切の御殿場』で、『静御前』に斬り掛けられて飛び退き、『静さま、何となされます』の台詞を言う時、静が刀を抜いて斬ってかかるのを、止める手は指先を曲げて出しますが、止めて了うと指先を開いて、人間の手の形にするというやり方です。

『忠信』の話が出ましたから申しますが、此役の狂いはあまり車輪に演じるとケレン*²になって、曲芸に終わりますから邪道に入ることになるので、五代目*³は明治二十九年の一月に『忠信』をつとめた時も、殆ど曲芸を用いず、精々欄干あたりを見せるくらいに止めていました。昔の狐の縫ぐるみは、現在のように絹糸のものを着るのではなく、絞羽製のものを使用したわけで、俗にこれをモヘル*⁴と言いました。謂わば丁度タオルと同じようなものでした。

五代目の『忠信』を見た見物は、『菊五郎が忠信をするのだから、定めて十分に面白いケレンを見せるだろう』と期待程のことがなく『つまらない』と言われたのに対して、五代目は『竹沢藤治*⁵じゃあるめえし、そんな軽業が出来るものか』と言って笑っていたことがありました。尚『狐』其他の獣の動作の中には、肩の揺り方、首の振り方、手の運び方、振返る挙動、両の手を鼻の所へ持って来てクシンクシンという事、足は指先きを揃えて爪先下りに歩く事等、それぞれに定められた方法があり、殊に『狐』の台詞は、言葉尻を早めて言う事になっています。又『芦屋道満大内鑑』の狂言の中、女形の『狐』役としての代表的なものに、狐葛の葉があります。其『機場』で葛の葉姫と狐葛の葉の二役早替りを見せたり、『子別れ』となつてからは、寝ている我子の童子に身の上を語る所で、

『我れは元誠の人間ならず、千年功経し』と言って、人や聞くと表を見ると、雷序という鳴物を打込んで山木戸が自然と開いて締り、『狐ぞや』と名乗る仕料などを見せたり、別れに望（ママ）んで一間二枚の障子へ、『恋しくば尋ね来て見よ和泉なる』の歌を、口書き、逆書き、投筆の曲書などで見せる人もあり、更に『信田妻』の振事には、『狐』の半面を塗笠の中へハチキ消す仕掛けなども用いられています。

次に猫の役の事を言ってみますと、尾上家には三代目菊五郎が得意でつとめました、『岡崎の猫』という狂言があります。此猫の手先なども、よく子供が鬼ごっこに『たま』というものを拵えるように、母指と人差指とで輪を拵えて、拇指のほかの四本だけを爪を拵えて指先を曲げることになっています。

其『岡崎の猫』の狂言は、岡崎の猫が十二単衣を着て、檜扇を持った姿で出るのですが、これは三代目に当嵌めて鶴屋南北が書下したもので、南北が此狂言の工夫をしている時、猫が錦絵を咬えて来たので、其絵が十二単衣の官女であったところから思いついて、十二単衣を着せることになったのが、今日の型に残ったわけだそうです。

右の『岡崎の猫』というのは三州*6の西尾という所にあった話で、西尾に住む武士の家へ、毎夜怪しいものが忍び込んで来て、鶏などを拐って行くので、其武士が非常に立腹して、或る晩のこと正体を見届けるために、鶏小屋の後ろに隠れて待っていると、真夜中頃になって、遠寺の鐘が遠く聞える時分、怪しい物音がして忍び込んで来たものがある。武士は予て用意の竹槍でつかかかった所が、槍を奪われてしまったので、むんずと組みついて、其怪物の咽喉のところへ喰いついたと言います。人間が怪物の咽喉へ噛みついたなどは、随分乱暴な話ですが、そうして朝まで取っ組んで両方ともに倒れてしまったのを、夜が明けてから人々が発見して介抱したため、武士は息を吹き返したと言いますが、怪物は其時に死んでいたそうです。後に西尾の殿様が後日の語草のためにもと、怪物の首の大きさを奉書に書かして置いたのだそうです。

怪物の正体は猫であったそうで、其大きさがちょうど小牛ほどもあって、頭の大きさは大奉書一杯に顔が書いてあったと言いますから、相当に大きなものと思われます。此絵を村岡應東*7さんの親御の梅逸さんから、五代目に譲って戴いて大事に保存してありました。そんなような話を取混ぜて、黙阿弥*8さんに書下して貰ったのが、『岡崎の猫』の芝居の段取で、五代目は獵師の繁歳と怪猫の二役を勤めましたのです。

《編注》

- * 1 尾上梅幸：六代目尾上梅幸。明治～昭和初期の歌舞伎俳優。
- * 2 ケレン：見た日本位の奇抜さをねらった演技や演出。
- * 3 五代目：五代目尾上菊五郎。著者の父。
- * 4 モヘル：モヘアのこと。アンゴラヤギの毛や、その毛から作った織物を指す。絹のような光沢がある。
- * 5 竹沢藤治：幕末の曲独楽師。

- * 6 三州：三河の国。
- * 7 村岡應東：明治～昭和期の日本画家。
- * 8 黙阿弥：河竹黙阿弥。幕末～明治期の歌舞伎作者。